

富士フイルムホールディングス株式会社

2023 年 3 月期 決算説明会

主な質疑応答

Q：第 4 四半期実績について、営業利益の社内計画に対する遂行状況を教えてください。

A：574 億円の計画に対して実績 705 億円と過達となった。内訳については、ヘルスケアで 75 億円の未達。バイオ CDMO におけるプロセス開発や微生物培養案件の先送りのほか、ライフサイエンスの増地事業において、想定に反して原材料の需給ひっ迫が回復しなかったことが主な要因。マテリアルズは 47 億円の過達。グラフィックコミュニケーションの構造改革や米国生産拠点の資産売却益などが要因。ビジネスイノベーション、イメージングは、事業の好調により、それぞれ 65 億円、79 億円の過達となった。

Q：バイオ CDMO について、今年度の業績見通しは？また足元の市場環境をどう見ているか？

A：今年度（2023 年度）は大型の生産設備の新規稼働がないため、売上高はほぼ横ばいとなる。営業利益は、インフレによるコストアップについて価格転嫁を進めることで改善させる。2023 年秋に設備完成予定のデンマークの第一次大型投資は、増設する 6 基全てが予約済みとなっており、医薬品規制当局からの製造承認取得の手続きや機械試運転など、一定の立ち上げ期間を経て、来年度（2024 年度）から本稼働し、収益に貢献していく。

市場環境については、成長領域である細胞・遺伝子治療で、一部バイオベンチャーへの資金供給が停滞している影響等をうけ、短期的な成長鈍化が見られる。一方で抗体医薬は、ADC（抗体薬物複合体）やバイスペシフィック抗体など次世代抗体薬が成長に寄与し、非常に強い需要が継続している。

Q：マテリアルズセグメントの今年度業績が減益予想となっているのはなぜか？

A：前年度には特殊要因として、グラフィックコミュニケーションにおける米国生産拠点の資産売却益が含まれていた。ディスプレイ材料では、値上げを進めるものの、9 月頃までは軟調な市況が続くとみている。電子材料も、市況悪化は今年の中頃までは続くとしているが、当社はロジックを中心に超先端向けの材料を提供していることから、影響は限定的だろう。なお、本日発表した Entegris 社の半導体用プロセスケミカル事業買収について、今年度業績予想には織り込んでいない。

Q：イメージングについて、販売が好調な INSTAX“チェキ”の、足元の市中在庫の水準や、地域別の販売状況は？好調の要因についても教えてください。

A：需要が強く、在庫は薄い状況でバックオーダーを解消できていない。地域別にはアメリカ、ヨーロッパ、次いで中国、日本が強く、インドも伸びている。

INSTAX“チェキ”が販売好調かつ高収益の要因は、スマホプリンターの「Link2」が伸び、フィルムの

使用量が増えていること。1 年間にスマホで撮影される画像数は、カラーネガフィルムの売上がピークだった 2000 年頃の撮影画像数に対して、数十倍の規模といわれている。このスマホにある大量の画像をどれだけプリントしてもらえるかが重要だ。写真事業は衰退産業とみられることもあるが、まだまだ成長の余地はあり、今後もキャッシュを創出させる。

Q：キャッシュアロケーションについて、3 年間累計(2021 年度から 2023 年度まで)の設備投資額が、中期経営計画(中計)より 3,714 億円増加する想定だが、その要因は？ また、中計期間を通して事業ポートフォリオを機動的・積極的に見直している中で、今後の M&A 戦略はどのように考えているのか？

A：設備投資について、中計からの増加分(3 年間累計で 3,714 億円の増加)のうち、為替影響は約 900 億円。それ以外の約 8 割はバイオ CDMO で、残りは電子材料やライフサイエンス(培地)での設備投資となる。

M&A について、当社はこれまで買収した会社の PMI を着実に進めており、例えば 2021 年度に日立製作所より買収した画像診断関連事業は、大きくシナジーを出すことに成功している。2000 年度以降、累計で 1.6 兆円以上を買収や出資に投じており、社内で人材や知見を蓄積したことで、スピード感のある判断もできる。買収済みの案件を着実に成長させることに加え、良い新規案件があれば、機動的に実行していく。

以上